

## 付 周辺遺跡分布調査報告

## 一、遺跡の概要

玉城遺跡の発掘調査と並行して、1985年7月12日より21日まで義 憲和氏、吉岡武美氏の御協力を得て周辺遺跡の分布調査を実施した。調査は主に、聞き込み、現状の確認及び資料の採集を中心に行なった。これらの調査で得られた資料は、大城・大和城及び千間・塔原・鍋窪・大久保・戸ノ木・馬塔（以上天城町）・ナーデン塔（徳之島町）の9ヶ所にわたる（5頁・徳之島主要遺跡分布図参照）。なお、千間・塔原・戸ノ木・大久保ほか数地区における表採資料については上村俊雄氏によって既にその一部が報告されている。<sup>註1</sup>（友口）

### 1. フーグスク 大城（図版1～4）

大城は大島郡天城町大字松原字大城山の山頂に存在する。遺跡の所在する大城山は徳之島を南北にはしる山塊の北端近くに位置する山で、徳之島町との境界線上にあり、標高は329mをはかる。山肌は、鬱蒼としたシイ等の原生林におおわれており、斜面は急峻である。麓から1本の登り道が通っているが、それをたどることも容易ではない。

頂上に、山頂を掘削して造ったと思われる馬蹄形の平坦面と土塁状の施設及び平坦面を取り囲む石垣状の石積みがある。石積みの下は崖となっており、その下もまた平坦面となっている。これらはいずれも人為的な所産のものと思われる。

西南に開いた馬蹄形を呈する平坦面は長さ32m、幅17mで「広場」と呼ばれていたという。その北東側には土塁状の地形があり、それによって堰かれているが、他は眼下の天城町全域の台地とその先の海岸に向って開かれている。「広場」のほぼ中央には最近の建材を用いた小家屋があるが、大城の司祭者の末裔にあたる婦人の建造によるという。

土塁状の地形は、長さ13m、幅3.5m、高さ3m程の北西～北東に細長く延びるもので、大城山山頂を切り崩して「広場」を平坦にならした際に意識的に削り残したものである。「広場」の奥には巨岩が組み合わさって聳え立っている。人里をはるか

に隔てた山頂のことでもあり、人を畏怖させるものがある。土塁の頂上は比較的平坦であり、西北端には拳大の石数十個から成る集石がある。祭祠に関連したものと思われる。土塁状の地形の北東側は一挙に200m以上落下する急斜面で、人の接近は極度に困難である。土塁の頂上からは山あいをはるかに徳之島東海岸を見わたすことができ、その間に徳之島町花徳<sup>ケトク ミヤグスク</sup>の宮城が頂上をのぞかせている。宮城は大城の出城であったとの伝説もある。<sup>註2</sup>

平坦面の南西側の縁を囲む石垣状の石積みの高さは高いところで約60cm、低いところで30cm前後である。人頭大から拳大の石が使用されており、やや不揃いである。南東側及び南側に1ヶ所ずつ石積みの途切れている場所がある。南東側の切れ目は、幅1.5mで、両側の石積みの面は他に比べて凹凸が少なく、意識的に面を揃えて重ねられたものと思われる。麓からこの切れ目まで1本の登り道が切り開かれてあり、この切れ目は「広場」への“入口”の役割をもつものと推定される。南側の切れ目は南東のものに比べてやや幅が狭く、両側の石積みもそれほど丁寧なものではない。地元の伝承によれば、南東側の石垣の切れ目は「たつみの門」、南側の切れ目は「はえ門」と呼ばれている。(図版2下・3上)

「広場」の南側下は、3m程の崖になっており、崖の下には「二の丸」と称される長さ20m、幅10mの略長方形の平坦地が棚状に開けている。見はらしが良いことは「広場」と同様であるが、特別な施設は見あたらない。なお、「二の丸」の下も2～3mの崖になっていて、同様の平坦面が広がっている。「広場」から次々に土を掻き下したことと関係がありそうである。その下はシイ等の原生林におおわれた急峻な斜面となっている。また、「広場」の北西部にはやや陰阻ではあるがテラス状の地形が延びており、「馬の足ハラシ道」といわれる馬の調教場とその先の「見張り所」があったと伝えられている。<sup>註3</sup>

## 2. 大和城<sup>ヤマトグスク</sup> (図版5)

大和城は、大和城山(標高251m)の頂上付近に所在したとされる城<sup>グスク</sup>で、一帯の地籍は大島郡天城町大字天城字上名道<sup>カミナミチ</sup>である。大和城山の所在する丘陵は徳之島中央を

南北にはしる山塊から天城町の海岸に向って西側へ延びているもので、その先端近くに東西に並んで二つの山丘が聳え立っている。東側の山丘は大和城山、西側の山丘は<sup>タケヤマ</sup>獄山と呼ばれている。南から大和城山頂に向って登り道が通っている。斜面は峻険でシイ等の密林におおわれている。

山頂には10m 四方形の広がりがあり、第2次世界大戦中に頂上を掘削して築造されたトーチカ式の高射砲陣地の跡がある。頂上の東寄りには軍人山寺と呼ばれる小さな祭場があり、<sup>註4</sup>琉球焼の小壺や供物が供えられているが、高射砲陣地構築の際に現位置に移されたものだという。全体の変形が著しく、旧状を推定するのは困難であるが、大城のような大がかりな平坦面や石組等はなかったものと思われる。<sup>註5</sup>後方東側は、雑木林によって視界がさえぎられているが、他の三方は台地と海岸に向って開かれており、非常に見はらしが良い。東側の雑木林から中腹の祭祀所近くまで堀割りの跡らしい地形が残っているが、戦時中に掘られたものだろうという。

中腹にある祭祀所—山寺—は、<sup>註6</sup>縦・横ともに50～60cm程の板状の立石の前にコンクリートブロックを置き、径5cm程の珊瑚塊を中央に据えてある。珊瑚塊の前には杯や供物が供えてあり、向って左には手水鉢を思わせる長さ約60cmの中凹みの石が置いている。

ところで、大和城には玉城と関連する伝承がいくつか伝えられている。大和城は玉城の見張り所であり、「マンキカタナ」(戈) やくつわの音が玉城に向って夜間鳴り響いたなどといわれている。<sup>註3</sup> (友口)

### 3. <sup>センマ</sup>千間遺跡 (第1図、図版6・7・11上)

<sup>カネク</sup>兼久集落の西、海に臨む隆起石灰岩台地の崖上に立地する。汀線に沿った狭隘な平地との比高約70m。1975年、石灰石採掘の際に天城町教育委員会が確認、保護している。全体として西に張り出しぎみの地形で、現在ではその大部分が削平されているが、住居址に関係すると思われる径10m程の黒ずんだ土の広がり数ヶ所あり、土器片が散布している。谷に臨んだ北側の縁には自然地形の残存部があり、遺物の包含層が遺存している。なお、遺物は現在、天城町中央公民館と兼久在住の向井一雄氏によ

て保管されている。

## 土器 (1～37)

当遺跡における表採資料のほとんどが深鉢形土器の破片で、壺形や鉢形の土器の破片は数点にすぎない。深鉢形土器についても全姿の復原は困難である。

この深鉢形土器の口縁部は直立またはやや外傾し、口縁の肥厚するものとしのないものがあり、それぞれに有文のものと無文のものがある。文様としては押引文・沈線文・凹線文・刺突文が用いられている。

口縁部の形態により、施文部位、文様の組み合わせも考慮に入れて深鉢形土器の口縁部片約20点を以下のように分類した。

### 1類 口縁部の肥厚しないもの (1～4・7・8・13・18・21～23・25～27・33)

有文の土器は口縁部にのみ施文されたものと、口縁部と口唇の両方に施文されたものがある。前者では1・3・4・8には押引文、2には沈線文、21には凹線文が、23・25には押引文と沈線文が組み合わされて施されている。後者では、13・26には口唇に刺突文、口縁部に沈線文が、22・27には口唇に刺突文、口縁部に凹線文が施されている。7には口唇に刺突文、口縁部に押引文が施され、18には押引文が口唇と、口縁部の両器面に施されている。

無文の土器でこの類に属するものは、33のみである。

### 2類 口縁部が肥厚するもの (9～11・14・16・19・24・32・34)

帯状に肥厚するものがほとんどで、その大部分は有文である。9～11は押引文が、14は沈線文が、24は押引文と沈線文が組み合わされて施されている。帯状肥厚口縁をもつものでは32・34が無文である。

この他、16は断面形が紡錘形になる肥厚部をもち、沈線文が施されている。19は断面形が三角形になる肥厚部をもち、沈線文が施されている。

以上、口縁部の残存するものについて述べたが、口縁上部の欠失していると思われる破片については、有文のもののみを図示した。これらにも、押引文が施されたもの(5・6)、刺突文と沈線文が組み合わされて施されたもの(12)、沈線文が施されたもの(15・20)、凹線文が施されたもの(17)がある。

資料が統計上有効な量に達せず、各類の正確な比率は不明であるが、以上の深鉢形

土器の中では、押引文の施されたものが、口縁部の肥厚するもの・しないものの両類に5点及び3点ずつあり、最も高い割合を占める。

壺形土器には有文のものが2点(29・30)、無文のものが1点(31)ある。30は直立して帯状に肥厚する口縁部に押引文及び綾杉状の沈線文が施されたもので、口唇に刻目文が施されている。29は頸部から肩部に移る所に横位の押引文が1条施されている。31は無文の壺の胴部片であるが、内器面の調整が行き届かないため、粘土の接合の痕が残されたままである。鉢形土器は28だけで、口縁部に押引文が施されている。なお、底部の破片は3点(35～37)ともに平底である。

当遺跡出土の土器の質については、有文の土器は若干の例外を除き、その胎土は緻密であり、極めて微細な白色の粒子を含むことがある。無文の土器は個体数が少ないが、有文のものより吸水性に富む胎土をもつようである。焼成は良好で、色調は橙色もしくは赤褐色・褐色を呈し、ナデによる調整が施されるものが主流である。

当遺跡出土の土器のうち、1・3～11は面縄東洞式に、23～25は嘉徳Ⅰ式に、26は嘉徳Ⅱ式に当たる。また27は南九州地方の縄文時代中期末～後期前半の阿高式に関連する土器とのつながりを懸念させる点がある。

#### 4. <sup>トウバル</sup>塔原遺跡 (第1～6図、図版8上・11下・12下～13)

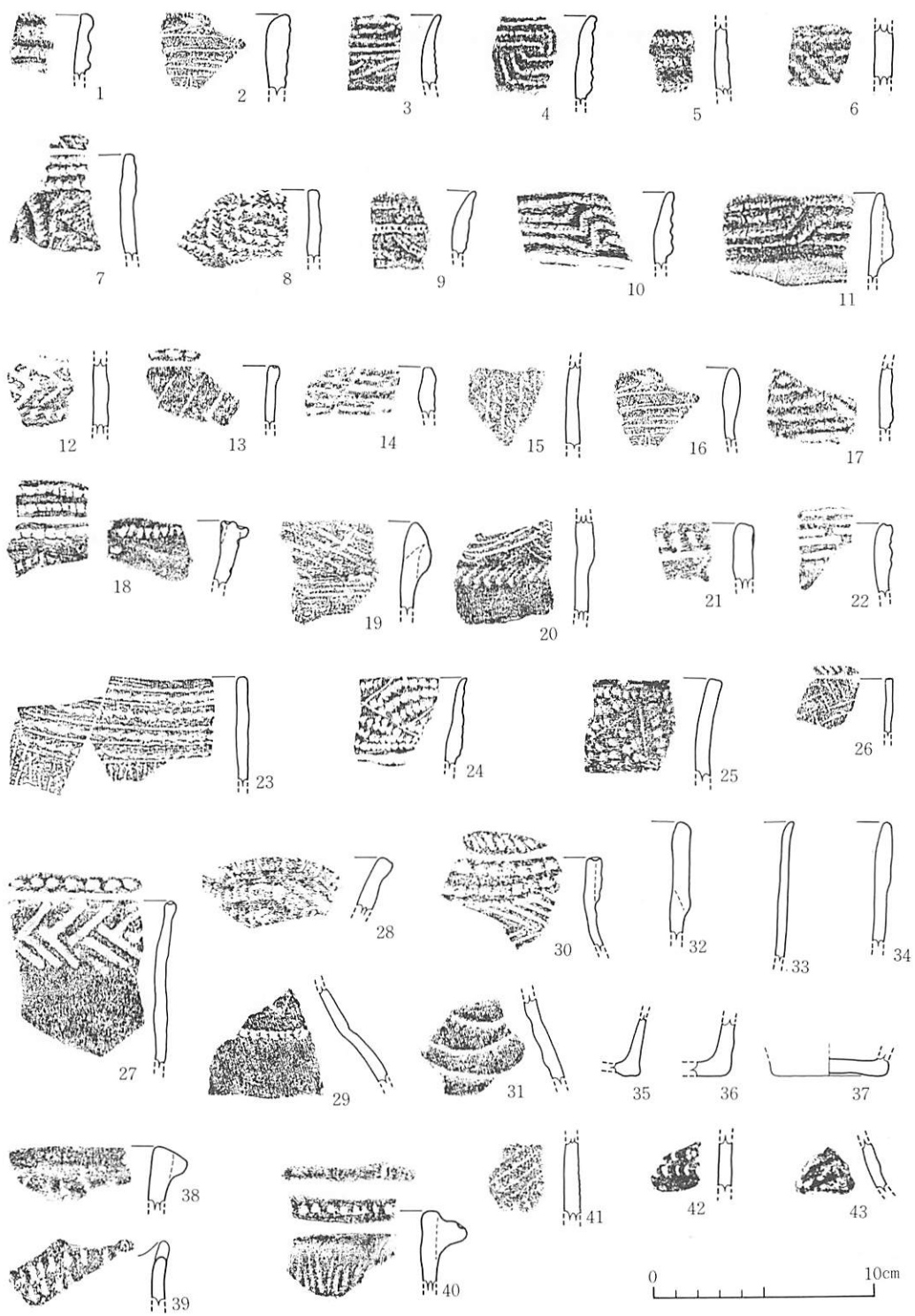
兼久集落の西海岸に臨む標高80mの台地上に位置し、1983年向井氏により発見された。遺物包含層は確認されていないが広範囲にわたって土器片、石斧・磨石等の石器、黒曜石片が出土している。現在、遺物は向井氏及び天城町中央公民館によって保管されている。

##### 土器 (38～65)

当遺跡における表採土器の大半が深鉢形土器の破片で、壺形や鉢形の土器の破片は数点にすぎない。いずれも全姿の復原は困難である。深鉢形土器の口縁部は、直立またはやや外傾するが、口縁の形態により以下の1～4類に分類される。

##### 1類 口縁部の肥厚しないもの (39・49・53・54)

有文のものは39だけで、口唇にリボン状の突起をもち、2列の刺突連点文が施され



第1図 表採土器実測図(1)  
 千間遺跡；1~37 塔原遺跡；38~43

ている。無文でこの類に該当するのは49・53・54の3点である。

2類 口縁部が帯状に肥厚するもの (44・45・58～61)

この類は無文のもののみで、リボン状の突起を口唇にもつと思われるもの(58～61)や、外耳を口縁下方にもつもの(61)もある。

3類 帯状肥厚部の下方が特に突出するもの (46～48)

無文のもののみで、口縁部の肥厚が下部で特に顕著で突帯状になるものである。

4類 口縁上部外側に貼付突帯をめぐらせたもの (38・40・55)

38は口唇部に突帯をもつことで逆L字状を呈し、突帯下に沈線文が施されている。40は口縁上部に断面形が三角形になる突帯をもち、突帯上面に刺突文が施され、突帯の下方に沈線がはしる。55は無文である。

以上、口縁部の残存するものについて述べたが、口縁上部を欠いていると思われる破片については、有文のもの2点(41・42)と無文のもの2点(51・52)を図示した。41は斜方向の沈線文が施され、42は爪形文が2条、横方向に施されている。また、51は上述の2類に、52は3類に属するものと思われる。

壺形土器にも有文のものと同無文のものがあり、43は2条の刻目文が施された頸部片である。無文の壺は2点(56・57)で、ともに直立し肥厚する口縁をもち、57はその肥厚が帯状になる。鉢形土器の破片は50のみで、「く」字形の屈曲部をもつ。

底部の破片は3点で、63・64は平底に、65は丸底になると思われる。また、62は脚部に大きな透かしのある脚台で、復原径は10cm前後になると思われる。

当遺跡出土の土器の質は、千間遺跡のものによく似ているが、胎土が緻密で、極めて微細な白色の粒子を含むことが多く、良く焼き締まり、橙色・赤褐色もしくは黄褐色を呈するものが大半で、調整はほとんどがナデ調整である。

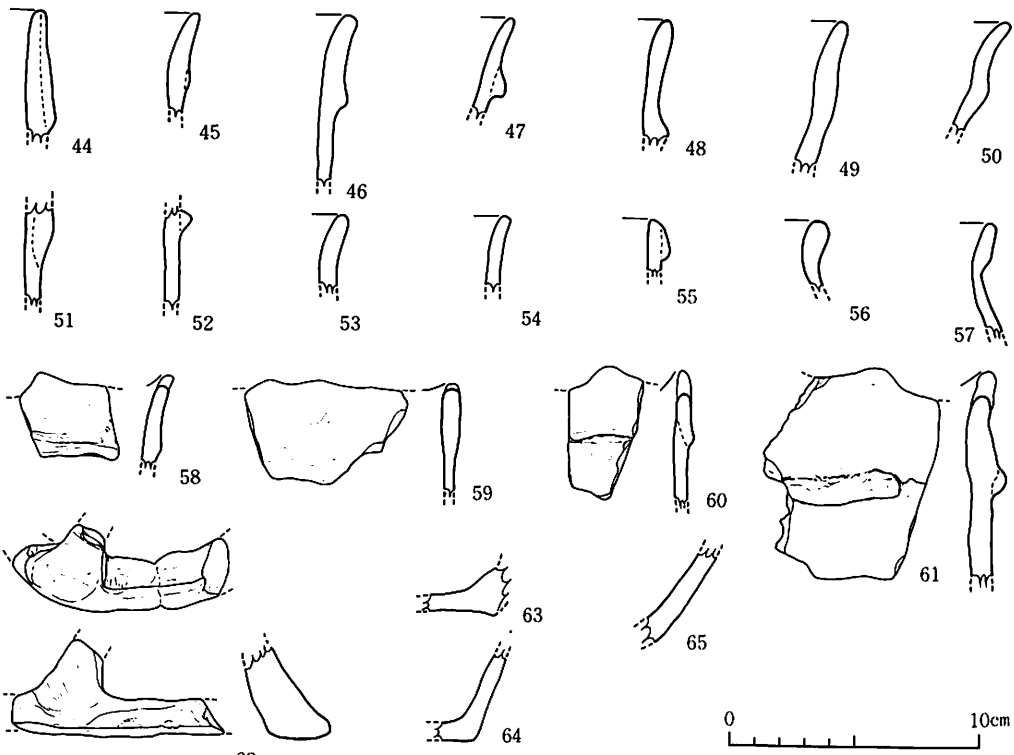
この遺跡の土器の大半を占める上記の2・3類に属する土器はそれぞれ大島郡住用村サモト遺跡<sup>4E7</sup>の土器分類におけるAⅣ類・AⅤ類に相当すると思われ、沖縄で出土するカヤウチバンタ系の土器に類似している。

石器 (66～86)

石斧 (66～83)

18点ある。うち68及び77は、石器の再利用を意図して調整にとりかかり、途中で放





第2図 表採土器実測図(2)

塔原遺跡：44～65

棄されたものと思われるが、磨製石斧として以下に分類した。

I類 (66・67)

片刃で、ほぼ長方形の平面形を呈するものである。66は極めて扁平な自然礫を利用したもので、刃部と側面以外はほぼ自然面である。刃縁に使用による刃こぼれが認められる。67は、腹面は平たく、背面は特に入念に研磨され、長軸方向に軽く膨らんでいる。断面は長楕円形である。刃部に使用による長軸方向の線条痕が明瞭に認められ、側面の頂部近くに、装着によると思われる磨耗部がある。

II類 (68～72・82)

両刃で、平面形がほぼ長方形を呈するものである。68の断面は楕円形で大きさに比して著しく厚く、上下端を打ち欠いてある。全面に入念な研磨が施され、背面は広範囲にわたって啄彫痕をとどめている。側面の頂部寄りに緊縛用の浅い割り込みが残っている。大形の石斧の破損品を再調整する途中で放棄したもののようなものである。69は啄彫を加えずに研磨を施してあり、全面に打彫痕を残したままである。なお頂部に大き

な挫屈痕がある。70は大形で著しく厚手の石斧の欠損品である。全体的な研磨はやや粗いが、刃部は入念に研ぎ出してある。断面は扁平ながら六角形を呈し、旧状の重厚さをとどめている。71の刃部は著しく傾いている。縦斧として使用されたためであろう。成形は入念である。72は刃部は両面から丁寧に作り出してあるが、随所に打彫痕が残り、特に頂部は全く磨かれず、その一部が欠損したままである。刃縁に刃こぼれがあり、側面のほぼ中央に装着のためと思われる浅い割り込みがある。82は極めて大形で整った感じの石斧であるが、全体として圭角があまり目立たない。刃部を中心に入念に研磨を施してあるが、全面に広く啄彫痕が残っており、特に頂部に著しい。刃部に刃こぼれと擦痕が認められる。

### Ⅲ類 (73～81・83)

頂部に比べて刃部の幅が広いもので、すべて両刃である。

#### Ⅲ a 類 (73～77)

平面形が台形に近い。76以外は小形で、73・75・77には入念な研磨が施してある。73は大きさに比べ著しく厚い。刃部を鋭く研ぎ出し、側面も丁寧に磨いてある。頂部は半分近くが欠失している。75は極めて扁平な石斧で、裏面の多くは自然面のままであるが、他の部分特に刃部は入念に磨いてある。刃部には使用による刃こぼれや線条痕・剝離痕が認められる。77は全面にわたる磨耗が観察され頂部は欠失している。刃部は著しく丸くなり、刃器の機能を果たし難い。他に転用されたものであろう。74は極めて堅牢な感じの石斧で、刃に傾きがある。頂部を除く全面に研磨を施してあるが、敲打痕と剝離痕が随所に残っている。断面はややいびつな楕円形である。76は大形で、著しく膨らんだ断面を呈する。頂部に啄彫痕が残り、側面の頂部寄りに装着痕がある。研磨は入念である。使用によるものか、刃部の片面全体が大きく欠損している。

#### Ⅲ b 類 (78・79・83)

平面形が二等辺三角形に近似する。78は軽量の石斧で、刃部が顕著に開き、使用による刃こぼれ、剝離痕が著しい。入念に研磨を施してあり、頂部側辺には装着のためと見られる磨耗が観察される。79は軸線が反り、刃部にも傾きがある。縦斧であろうか。研磨は全体的に粗く、随所に敲打痕が残り、どこことなく厳格さを欠く。83は小振りだが厚みがある。刃部はほぼ全部欠失している。あるいは大形の石斧の頂部の再利

用品であろうか。頂部側辺に装着痕らしい擦れがある。

### Ⅲc 類 (80・81)

縦に長い台形状の平面を呈し、撥形に裾広がりになっている。80は刃部が顕著に開き、全面に入念な研磨を施してある。表面の稜は特に明瞭にはしる。81は大形で厚みがあり、刃部は強く挫屈している。背面の側辺部に整形痕が著しい。

### 磨石・敲石 (84・85)

84は敲石を兼用する磨石である。平面形は楕円形で、横断面は長楕円形を呈する。表裏両面とも使用による滑沢が認められ、側面との接線は明瞭な稜を成している。また上下端及び両側面には敲打痕がみられる。85は、石斧を再利用した敲石である。平面形は、ほぼ長方形で、横断面は長楕円形を呈する。上下端には敲打痕が顕著に認められ、表面にわずかな凹みを有する。

### 凹石 (86)

平面形はほぼ卵形を呈し、表裏両面に凹みを有する。表面左上部を欠失している。上下端及び側面中央部には敲打痕、表裏両面には摩耗痕が認められ、敲石・磨石としての兼用が窺われる。

## 5. <sup>ナベクボ</sup>鍋窪地区 (第6図、図版8下・12下・13下)

塔原遺跡を約500m離れた海岸沿いの急峻な崖の上に位置し、千間遺跡と谷を挟んで対峙している。遺物が2ヶ所の畑地で採集されており、現在は吉岡武美が保管している。

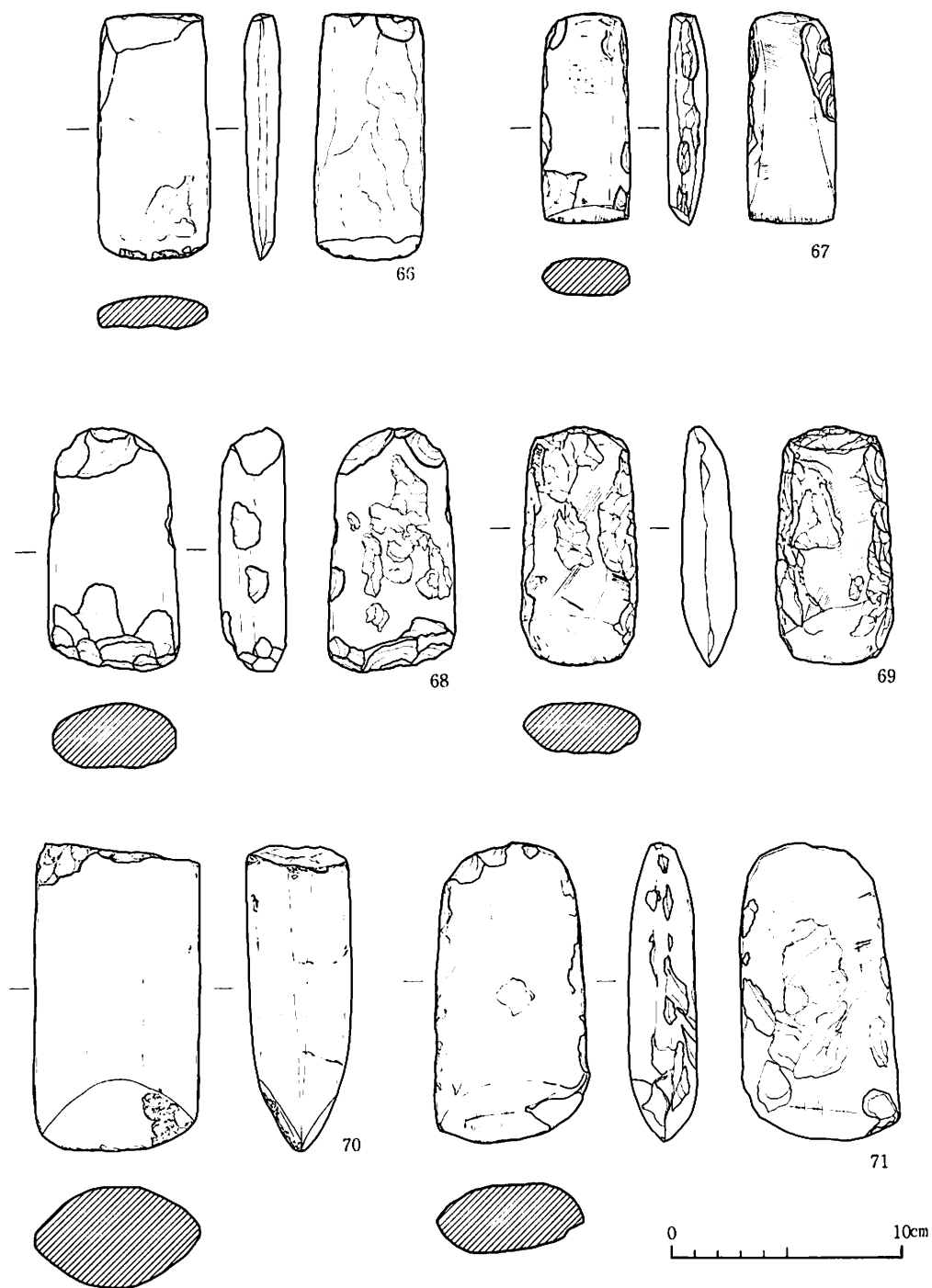
### 石器 (87・88)

#### 石斧 (87)

1点のみである。平面形はほぼ長方形で、断面は整った楕円形を呈する。刃部は強く挫屈し、背面を大きく欠損する。両刃であったと思われる。塔原遺跡のⅡ類に相当する。

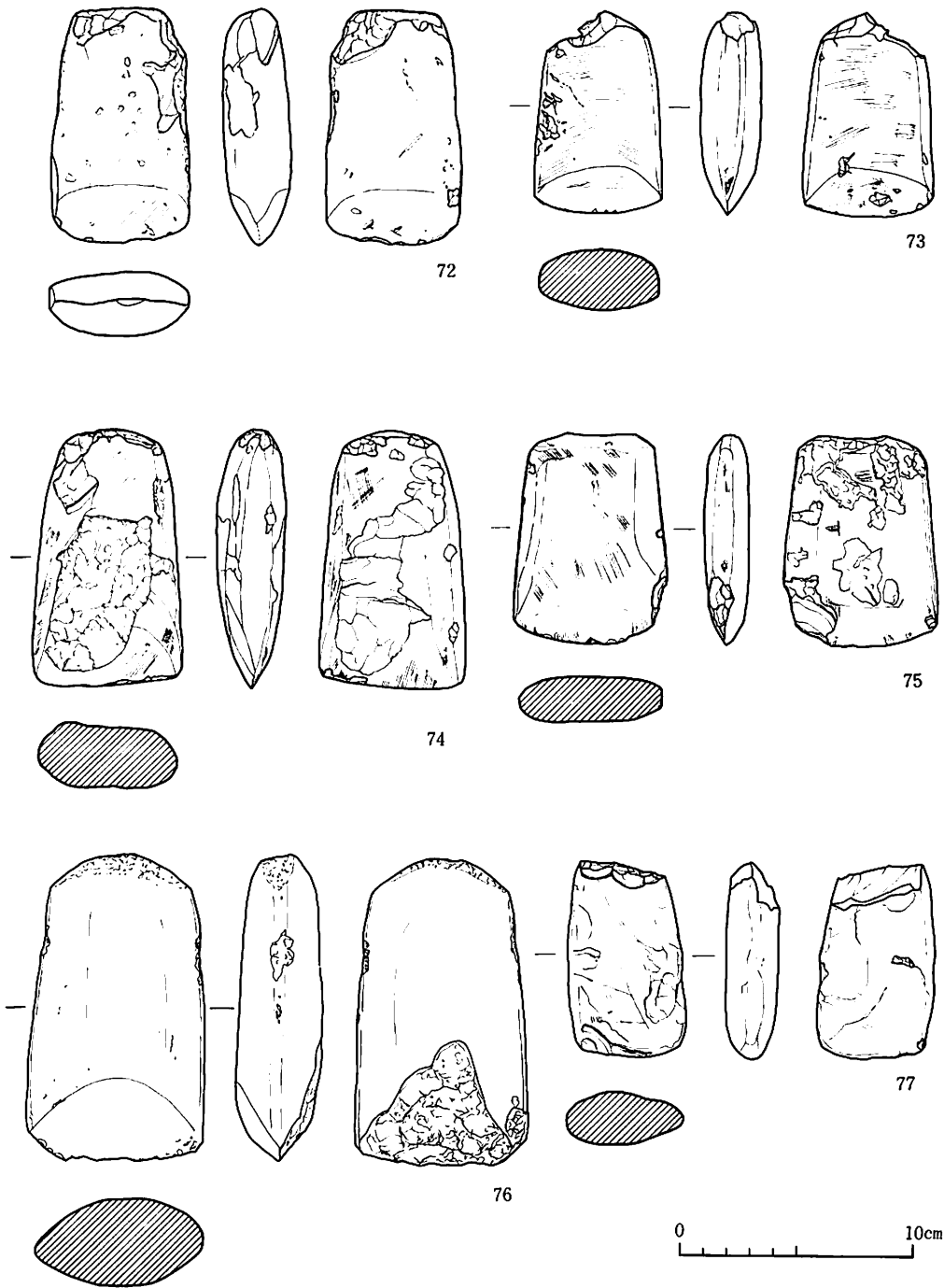
#### 敲石 (88)

石斧を再利用した敲石である。横断面は長楕円形を呈し、側面には稜がみられる。

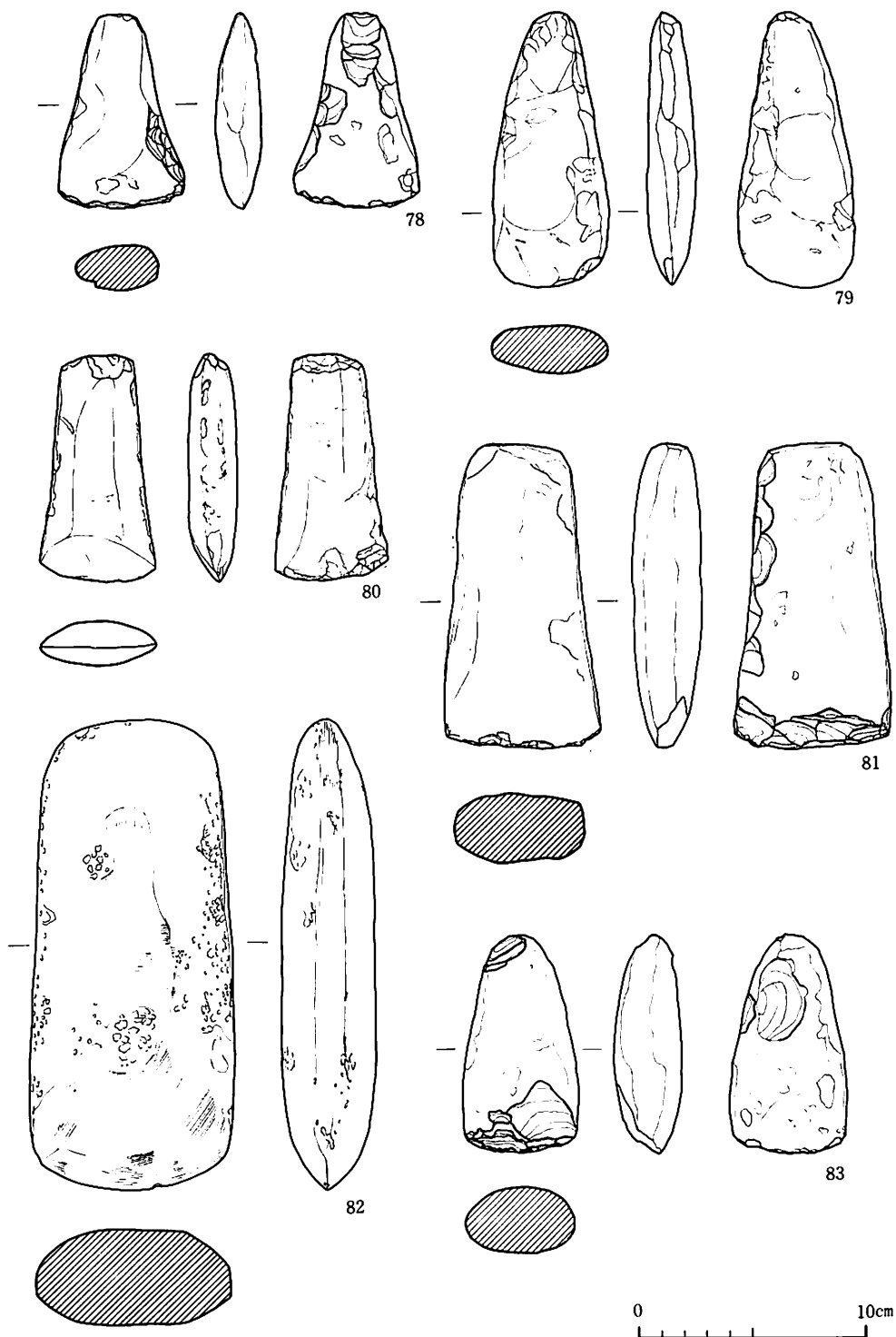


第3图 表採石器実測図(1)

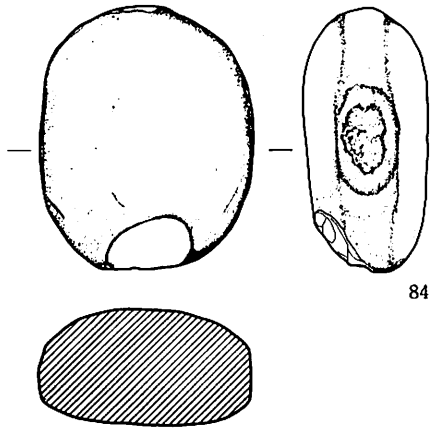
塔原遺跡：66～71



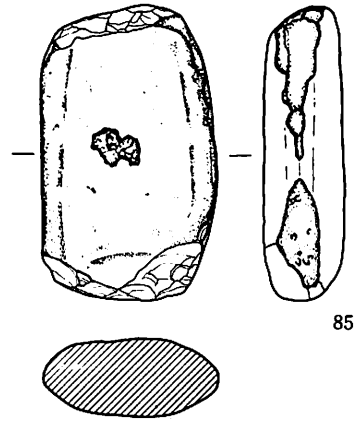
第4図 表採石器実測図(2)  
塔原遺跡；72~77



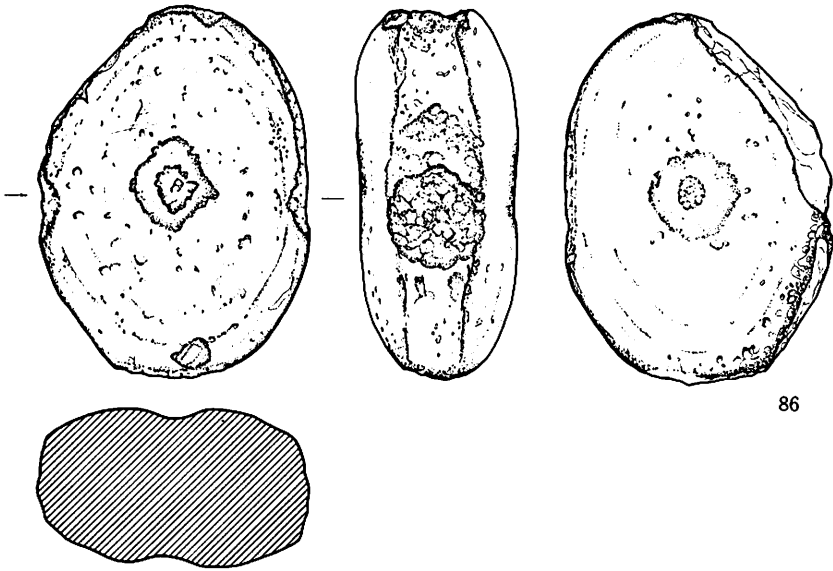
第5圖 表採石器実測図(3)  
塔原遺跡；78-83



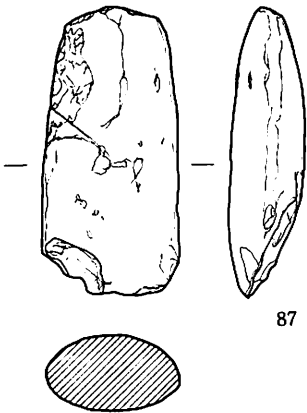
84



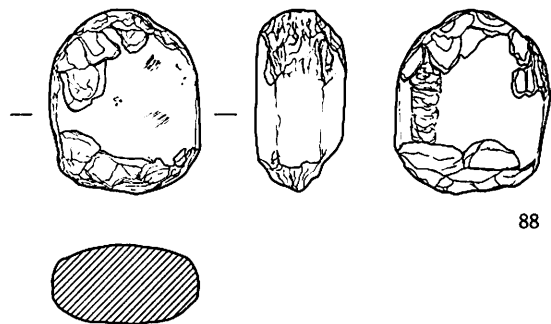
85



86



87



88

0 10cm

第6图 表採石器実測图(4)  
塔原遺跡；84~86 鍋窪地区；87·88

上下端に、敲打痕が顕著に認められる。また、裏面左側には長軸方向に並んだ幅 1 cm 程の一連の敲打痕がある。

以下の 5 地点における表採土器は細片が多く器形の復原も困難なため細分不能であり、各々の資料を挙げる程度にとどめる。

## 6. 大久保地区 (第 7・8 図、図版 9・12・13下)

平土野集落の西、海拔 10m 台の低い海岸台地の上であり、海岸との距離約 500m。昭和 56 年、畑地整備事業後に発見された。この際整備された階段状の土層断面に広範囲にわたって遺物包含層がみられ、遺物が散乱している。遺物は吉岡が保管している。

### 土器 (105・106)・陶器 (112~115)

当地区における表採資料の中には器形が不明な土器片と、カムイヤキ窯系の陶片がある。106 は肥厚する口縁部片で、押引文が 2 条施されていて、105 は上部を欠いた口縁部片で 4 条の押引文が施されている。112~115 はカムイヤキ窯系の陶片で、叩き痕が器面に残る。胎土は緻密で焼き締り、色調は灰色か灰褐色またはにぶい赤褐色を呈する。

### 石器 (121~124)

#### 石斧 (121)

1 点のみである。極めて堅牢な石斧で、断面は膨らんだ楕円形を呈する。形はいびつなままであるが、研磨は入念に施されている。背面に大きな剝離痕、刃部に刃こぼれ、挫屈痕がみられ、手荒い使用を推察させる。

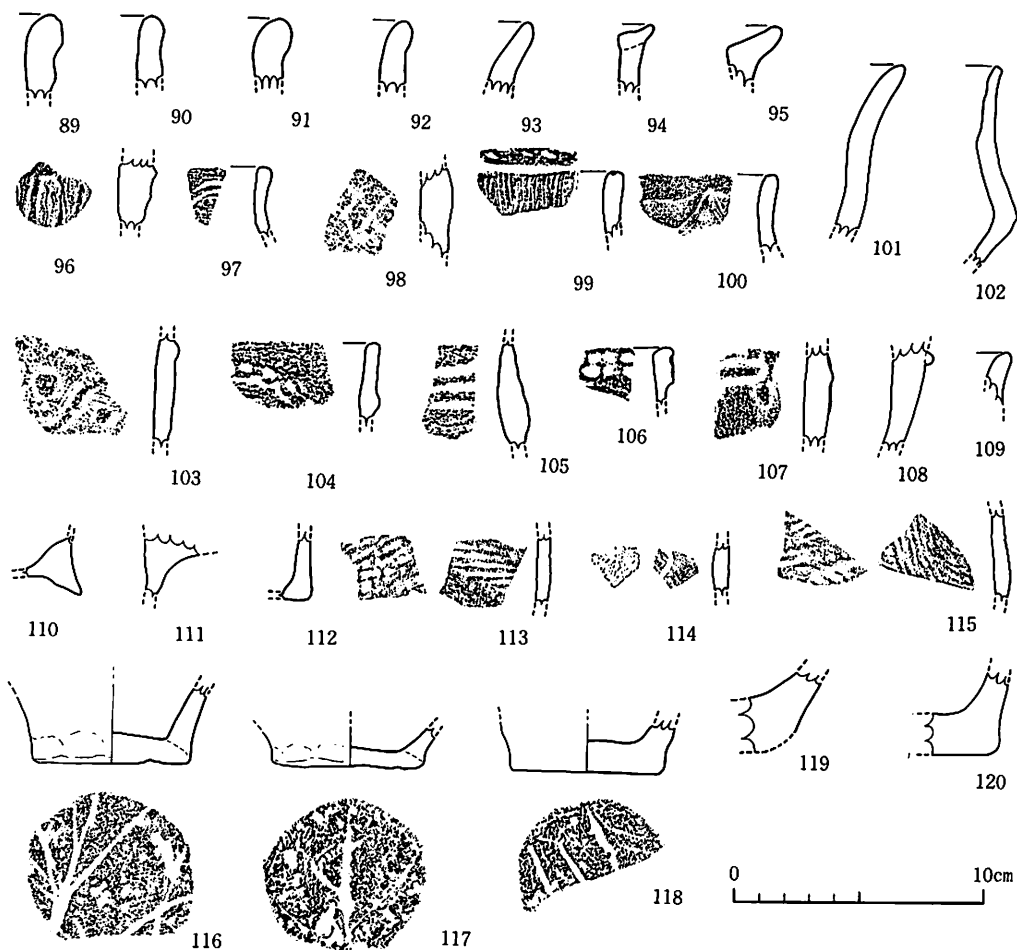
#### 磨石 (124)

敲石と兼用の磨石である。一部欠失しているが、平面の旧状はほぼ卵形を呈していたと思われる。側面には、使用により明瞭な稜を生じている。上下端及び右側面には敲打痕がみられる。

#### 凹石 (122・123)

123 は平面形・横断面ともに長楕円形を呈する。表裏両面には凹みを有する。側面





第7図 表採土器・陶器実測図(3)

大久保地区；105・106, 112～115 戸ノ木地区；96・97, 102～104, 107～111, 118・120  
 馬塔地区；93～95, 99～101, 116・117・119 ナーデン塔地区；89～92, 98

には、使用による明瞭な稜が認められ、特に上下端及び両側面には敲打痕が残っており、磨石・敲石として兼用されている。122の平面形はほぼ円形、横断面は長楕円形を呈する。表裏両面には凹みを有する他、全面に磨耗痕が認められる。また側面には使用による明瞭な稜がみられ、磨石としての兼用が窺われる。

## 7. 戸ノ木地区 (第7図、図版10上・12上)

浅間集落の西側、海岸のモクマオの防風林下の砂丘に遺物散布地が点在している。

前面には徳之島空港の立地する珊瑚礁原が断続的に広がる。採砂や、耕地整備によって数ヶ所が破壊されたが、現在でも広範囲にわたって土器片の散布がみられる。現在、遺物は吉岡が保管している。

**土器** (96・97・102～104・107～111・118・120)

当地区における表採資料の中には、深鉢形・壺形・鉢形の土器があり、前二者には文様が施されているものもある。

97は有文の壺、104は有文の深鉢になると思われる。96・103は有文の土器片であるが、口縁上部を欠失している。102は無文の鉢で、口縁下部に「く」字形の屈曲部をもつ。109は外傾する口縁部の破片である。107は、粘土紐の貼付文が縦横にはしる胴部片、108は突帯をもつ胴部の破片である。120は平底の一部、118は平底で木ノ葉の圧痕を有する。111は外耳の下端と思われる破片である。110は三角錐形の土器小片であるが、脚の一部ではないかと思われる。これらの表採品には、いわゆる兼久式土器に相当する土器片(97・104・118)も含まれる。

## 8. <sup>マトウ</sup>馬塔(前野)地区 (第7図、図版10下・12上)

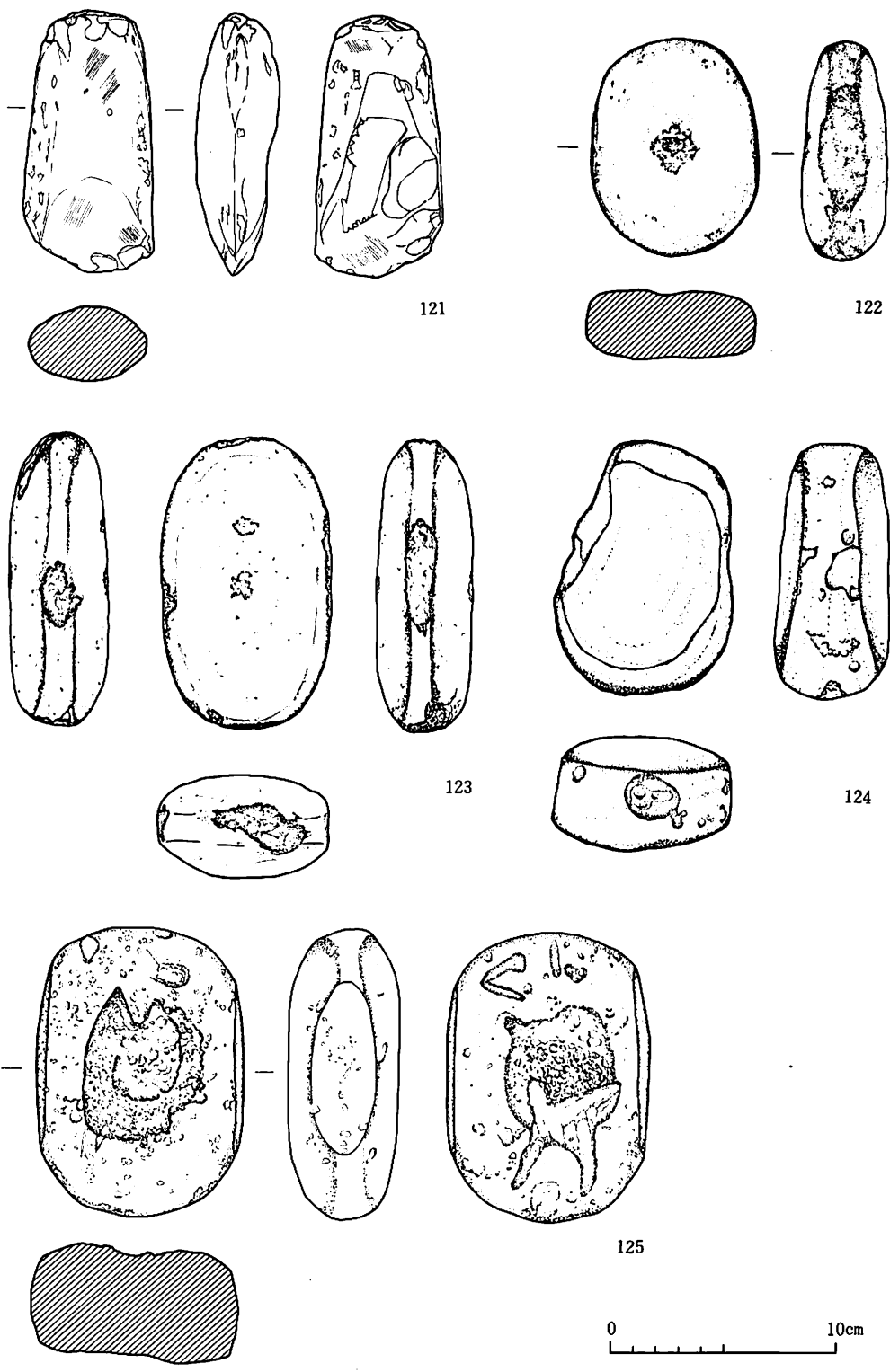
前野集落の西、<sup>ナーゴウ</sup>中川横の砂丘上に位置し、前面の海には礁原が断続的に広がる。採砂によってほとんどが破壊されているが、砂層に接する赤土層の断面の地表下約2mに土器片を含む層が発見された。遺物は吉岡が保管している。

**土器** (93～95・99～101・116・117・119)

当地区の表採資料にも有文・無文の両方の土器があるが全姿の復原は困難である。

有文の土器はやや外傾ぎみの口縁をもち、99は口唇に刻目文が、口縁部には縦方向の条痕がみられる。100は口縁部に鋸歯状の沈線文が施されている。無文の口縁部片は4点で、93・101はやや外傾し、94・95は口唇部に突帯をもち、逆L字形を呈する。底部片は3点で、116・117は平底で、底に木ノ葉の圧痕をもつ。119は平底ぎみの尖底である。

この表採資料には、いわゆる兼久式に相当する土器片(100・116・117)が含まれる。また94・95は九州本土の弥生系土器との関連を窺わせるものがある。



第8図 表採石器実測図(5)  
 大久保地区；121~124 ナーデン塔地区；125

## 9. ナーデン塔地区 (第7・8図、図版12上・13下)

徳之島町井之川集落の西南方向、井之川岳の裾野約180mの台地にあり、昭和54年に同集落の町田進氏によって発見された。土器片・石皿・凹石等が出土している。遺物は吉岡が保管している。

### 土器 (89~92・98)

当地区における表採土器はいずれも細片であり、ここでは一括して扱う程度にとどめる。土器片の大半は、無文で器壁がやや厚く、断面形拇指頭状の直立する口縁をもっている。98は交叉する沈線文が施された破片である。

### 石器 (125)

125は平面形・横断面ともに隅丸方形に近い凹石である。両面の凹みは通常の凹石に比べて異常に広い。また、側面は著しく磨耗しているので、大久保遺跡表採の凹石と同様磨石としての兼用が窺われる。 (吉岡・平・斉藤・松本)

註1 上村俊雄「徳之島の先史時代」『南日本文化第17号』 1984

註2 小林正秀「第二編 原始・古代」『天城町誌』 1978

註3 義 憲和「徳之島のグスク」『特別展—グスク—』沖縄県立博物館 1985

註4 戦時中、旅団戦闘指揮所が置かれ、兵隊たちがここで礼拝したため軍人山寺の名称があるという。ただし、以前からあったものを礼拝したのか、新たに何かが祭られたのか不明である。

註5 大がかりな広場や石組の跡なども見られず、人によっては祠も特別な施設ないし施設の跡もなかったと言う。また、大和城という呼称が最近になって誰からともなしに始まったものであり、古来のものではない、と主張する古老もいる。

註6 テダガナシを祀った祭祀所で、信仰する人によって現在も祭りが続けられている。テダガナシは、太陽神のことで、ウシ、ウマ等の家畜の神や様々な神々も祀られていると言われている。大和城の本来の祭祀所はここであったと言う。

註7 熊本大学文学部考古学研究室「サモト遺跡(2)」 1984

## 二、まとめ

周辺調査の手始めに、玉城の参考にすべく、大和城・大城を視察した。大和城については旧日本軍の障地以外の特別な施設の跡を見出すことができず、全体としての山の偉容と里辺を見はらすことのできる地理的な条件が注目されるにとどまった。大城は、人間の生活する場所からは隔絶した、その奥まった神秘的な雰囲気と接近の困難さが注目された他、岩場の前の広場とそれを囲む低い石組の列など、防御施設というよりむしろ、全体の様子が奄美大島住用村の喜界岳祭祀址等に似通っていることが話し合われた。

先史遺跡一般については、その分布に時代による明確な片寄りが観察された。すなわち玉城遺跡を境にして、北側に弥生相当期以降の遺跡が、南側に縄文後期頃に相当する時期の遺跡が分布する。前者は馬塔（前野）・浅間・大久保・戸ノ木等であり、後者は千間・塔原・鍋窪等の地点である。

玉城あたりを境にしてその南は汀線に接近して100mに達するほどの琉球石灰岩の断崖が続き、各遺跡はいずれもその先端近くに占地している。これに対し、北側はなだらかな地形が広がっており、砂丘を持つ緩やかな汀線が続いている。遺跡はいずれも標高25m以下の地点に占地している。その際、南側の断崖の下には珊瑚礁の広がりがなく、北の平地の先端からは広闊な礁原が沖合いに張り出していることは注目に値する。沖縄方面の遺跡分布の変遷の傾向とも軌を一にしており、縄文相当期から弥生相当期に移る頃、奄美においても生活の体系に大きな変化があったことが推察される。

(馬原・友口)

註 1984年12月住用村教育委員会・熊本大学調査